



Title	技術を展示すること：民博企画展「インド刺繍布のきらめき バシン・コレクションに見る手仕事の世界」を事例に
Author(s)	上羽, 陽子
Citation	デザイン理論. 2011, 56, p. 106-107
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53457
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

技術を展示すること

—— 民博企画展「インド刺繍布のきらめき —— バシン・コレクションに見る手仕事の世界」を事例に

上羽陽子／国立民族学博物館 文化資源研究センター

1. 目 的

技術はいかに展示できるか。国立民族学博物館（以下、民博）企画展「インド刺繍布のきらめき—バシン・コレクションに見る手仕事の世界（2008年10月9日～2009年3月31日 実行委員長・三尾稔准教授）」において、刺繍布に施される刺繍技術の特徴を、文字による解説ではなく、布と糸、針を使って工程を再現した刺繍技術解説パネルによって視覚化した。

同企画は、インド手工芸開発にとりくんできたB.B. バシン氏の所蔵品の中から約360点が、民博へ平成19年度に収集されたことに起因する。展示企画内容は、約100点の刺繍布を用いて、主な制作地であるグジャラート州の女性の手仕事をとりまく社会背景や、バシン氏の手工芸開発に関する仕事を通して、変動するインド社会において手工芸を継承する人びとの営みを紹介するものであった。

本発表では、同企画展において実践した刺繍技術解説パネルとミラー刺繍ワークショップを事例に、異文化理解を目的とした技術展示の可能性と課題について報告をおこなう。

2. 刺繍技術解説パネル

インド西部の刺繍布の特徴は、少ない糸や布を巧みに利用していること、多様な刺繍技術が1枚の刺繍布に施されていること、ガラスミラーや子安貝、ボタンなどさまざまな素材によって構成されていることである。

これらの特徴は、この地域の社会背景や生活の中から生まれたものである。そのため、来館者に刺繍布の特徴を理解してもらうこと

が、同地域の社会と文化の理解促進につながると考えた。どのような方法で、来館者へ刺繍布の特徴を伝えるか。この点について、刺繍技術の特徴の可視化をもとに、企画展では、刺繍布を特徴ごとに分けてグループ展示をした。そして、各グループの前に技術的特徴を示した刺繍技術解説パネルを合計15枚提示した。

3. ミラー刺繍ワークショップの実施

ミラー刺繍とは、インド西部の特徴的な刺繍技術の一つで、ガラスミラーを布に糸で縫い留める技術である。企画展開催期間中に二度にわたり、ミラー刺繍をおこなうワークショップを実施した。本ワークショップでは、現地での女性たちの生活や刺繍制作風景、通過儀礼における刺繍布の扱われた方について、写真や映像資料を用いて解説をおこなった。



刺繍作業中のラバーリー女性

同時に、ミラー刺繍制作を体験し、刺繍布に施された女性たちによる手作業の蓄積を感じてもらうことを目的とした。さらに、参加者自身の作業経験をもとに、標本資料をより深く観察する目を各自が養うことも目標とした。また、企画展においては、保存上の理由から触れる標本資料が無かったため、本ワークショップでは、報告者自身の資料を用いて、現地の刺繍布を積極的に触る、着用するということを通じて、糸の集積による布の厚みや重さ、手触りを感じて、異文化理解への促進を試みた。

4、今後の課題と可能性

2008年3月に新構築をした民博西アジア常設展示場のパレスチナの女性衣装のコーナーにて、刺繍技術解説パネルの展示手法を応用して採用した。企画展という一過性展示での展示手法を、より改良して他の展示へ活用することによって、技術を展示する手法への可能性と広がりを見ることができるとともに、技術解説パネルの比較によって、多岐にわたる地域の刺繍技術の比較研究が容易になると

考えられる。

また、今回制作した刺繍技術解説パネルの特徴は、携帯可能という点である。企画展終了後は、民博の標本資料として管理され、他機関への貸出が可能となる。可動性を有効に利用することで、他機関での展示・調査・研究への応用が期待される。2008年夏から開催される『超絶刺繍——ヨーロッパ・インド・日本のわざ（神戸ファッション美術館）』において展示が予定されている。

さらに、報告者が近年、注目していることとして、現地の人びとの在来知識をどのように視覚化するかということがある。刺繍技術解説パネルや実制作ワークショップは、研究者の現地調査の蓄積によるものである。現在、民博には約26万点の学術標本資料が収集されている。これらの資料を用いて、在来知識の視覚化を目的としたワークショップをおこなうことを提案する。本発表の刺繍技術解説パネルのように、視覚化が可能なパネル制作などを研究者、教員、学生、職人、作家、一般の人びと、さらには現地の人びとを巻き込んで、それぞれの在来知識と学術標本資料を相乗的に活用するワークショップ実施を今後、取り組みたいと考えている。



刺繍技術解説パネル



企画展展示場風景